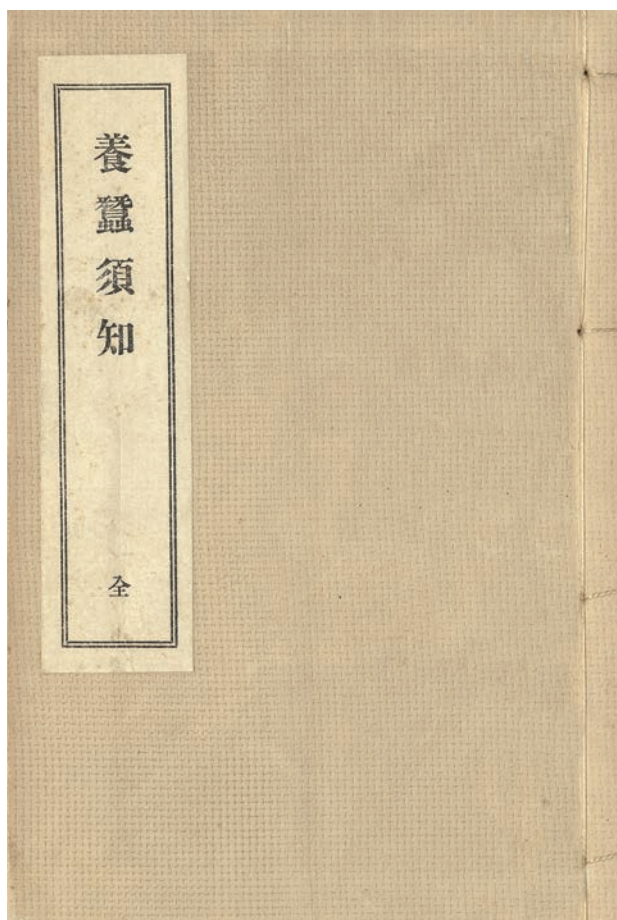


養蠶須知 全

復刊版



群馬地域文化振興会

目次

一 扉

澁川町養蠶實行組合長

後藤善十郎

一 題字

農林大臣 後藤文夫閣下

一 題字

群馬縣知事 金澤正雄閣下

一 吉田芝溪先生筆 謝枋得養蠶詩

一 序文

群馬縣蠶絲課長 西村實二

一 吉田芝溪先生略傳

八幡宮社司 堀口藤造

一 跋文

小學校長 田部井鹿藏

一 緒言

澁川町養蠶實行組合長 後藤善十郎

吉田芝溪先生遺著

養蠶須知

淡川町養蠶實行組合長

後藤善十郎謹書

張其成

乃

天

亮



滿體玲瓏
空簇

芝溪先生語

金澤正雄教錄



蚕

宋謝枋得

養口資身賴以素百千生子蛾眉長吐絲
不羨蜘蛛術餘葉頻催織女忙三起三眠
時化運一伸一屈命天常待看猷繭成繅
後先為君王作袞裳

序

本邦蠶絲業は、今や我國民經濟の支柱にして、帝國唯一の國際的産業たるの域に達せりと雖も、其發達の過程を窺ふに、斯業の起源は古き歴史を有し、太古上古王朝鎌倉及室町時代と幾多の推移はあれど、概ね一進一退の状態に過ぎず、斯くて江戸時代に入り徳川の中世に至り、永き太平と都會の文化は絹布の需要を増し又農業の發達は蠶業の技術的進歩を促し、當時數多の先覺者が輩出し幾多の著述が出版せられ、蠶絲業國たる素地作らるゝに至り、時偶々安政の開港と相俟ち、斯くて永き由來を有する本邦蠶絲業も、始めて秩序的進展の道程を辿るに至りたるの推移に想到せば、今日の興隆も其原動の力は、當時の先覺者に負ふ所甚大なるを思ふ。

我上毛の地は、養蠶昔より多く海内第一と唱へられ、従ふて斯業の先覺者も輩出し、彼の徳川時代に於ける蠶書の内にも、正徳二年馬場重久氏が著す蠶養育手

鑑又寛政六年吉田友直氏が著す養蠶須知、何れも其名夙に高く、本縣に於ては當時前記二書に就て専ら研究せられ、之に自己の工夫を交へて飼育したるものは最も進歩せるものなるべし。

吉田友直氏其號を芝溪と稱し、群馬郡澁川町の人、幼にして文事を好み、去れども農耕を棄てず、郷黨教を請ふ者多く著述する所養蠶須知の外幾多あり、農耕の傍ら又時弊の矯正を論じ書を當路に呈する等、郷土の偉人として遺徳を景仰せられつゝあるは地方文化の偉觀にして、其著す養蠶須知が世人に愛誦せらるゝは上毛蠶絲の偉彩と謂ふべし。

澁川町養蠶實行組合は、組合長後藤善十郎氏を始め組合員全員が眞に一致協力し、斯業の改善共同事業の振興組合の基礎確立に邁進し、今や縣下は勿論全國中有數の模範組合として推奨せられ、昭和七年四月大日本蠶絲會の表彰を受け、業績年と共に隆々前途頗る期待せられつゝある處、今又芝溪先生の遺稿養蠶須知を刊行して普く世に頒布せんことを、誠に此の組合にして此の舉ありと謂ふべく、先賢

を敬慕するの美風將又文化鍊成への貢獻蓋し偉大なるものあるを思ひ、欣喜に堪へず一言所感を序す。

昭和八年八月

群馬縣蠶絲課長

西村實二

吉田芝溪先生略傳

芝溪先生氏は吉田諱は友直、字は子正、通稱宇助後襲名して甚兵衛と改む、芝溪は其號なり。上野國群馬郡澁川の人、家世々農商幼にして大志あり、以爲らく男子應に讀書して名を後世に傳ふべしと同郡北牧村山崎石燕に従つて儒學を學び廣く經史を涉獵す。曾て云ふ「讀書字を識るを先とす」と字彙を讀むこと一千回遂に之れを諳んず。力學の狀想見すべし。年甫めて十七石燕病歿す。尋で山城の人平澤旭山に師事し經を講じ文を研く學業漸く進み殆ど其堂に昇る旭山著す所の漫游文章に芝溪兄弟の名所々に散見す、而して爾來研學著書自ら娛み世を終る迄力めて已まず、蓋し先生の學術に於ける虚談以て世を睥睨するの傳と同じからず、其の享和文化の間に在つては家弟翠屏と謀り澁川の内芝中と唱ふる地を開墾し良田三十餘町を得兄弟相携へて此に住し耦耕す。文化三丙寅の二月門下生木暮賢樹を伴

ひ水戸に遊び杉山仙太郎の家を主として居り自著開荒須知養蠶須知の二書を源武公に上る、武公之れを嘉納し賜ふに常盤絹一匹金若干を以てす。幾もなく去つて家に歸り農耕研學著書益々勉む傍ら時弊の矯正せざる可らざるものあるを見て書を岩鼻代官所に呈する數回孰れも憂世の至情紙面に溢れ所論剴切を極む、先是郷黨教を先生に乞ふもの尠からず、此に至つて名聲頓に揚り遠近贊を執るもの益多く絃誦の響は山禽の聲と和鳴す己にして先生病を病み溘焉家に歿す。實に文化八年辛未六月十九日也、享年六十墓は澁川町字折原即ち芝中の地に在り、明治四年舊門下生及び地方有志胥謀り六十年遠忌を修す、先生子無く家弟の長子大二郎を以て嗣とせしも不幸先つて夭折す。先生下世の後其の心血を注ぎし新田も亦荒廢に屬し近年復興せんとする機運に向ふ先生著す所辨學遼東豕十二卷、附錄一卷、開荒須知二卷、養蠶須知二卷、救荒須知一卷、芝溪遺稿三卷等あり未だ剗劂に附するに到らず。蓋し辨學遼東豕十二卷、附錄一卷は先生世に在るの時幕府に獻し幕府之れを嘉納せしと言ふ、大正五年十月東京高等蠶絲學校創立三十年記念展覽

會開催の際養蠶須知稿本を出陳せしに

皇后陛下 行啓遊され台覽の光榮を賜はりしが還啓の後更に皇后宮大夫を経て
畏くも再び台覽を賜はるべきに付御手許に差出すべき旨御沙汰あらせらる無上の
榮譽と謂ふべし。

予曾て東京高等蠶絲學校に學び後専ら蠶糸の實務に従ふ、常に芝溪先生に私淑
し斯書に依つて訓化を受くる處甚大なり。這次澁川町養蠶實行組合に於いて斯書
の再刊頒布の舉あり、先生の略傳を稿して之れを寄す 云爾。

昭和八年四月

澁川鎮守郷社八幡宮 社司 堀 口 藤 造 誌

